

(別紙の2)

自己評価及び外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	なるべく笑顔で接する様心掛けており、会議の場で確認するようにしている。	理念及び行動指針はホールの目に付きやすい場所に掲示され、新人研修時や会議毎の読み合わせ等で共有に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	コロナの影響もあり地域との付き合いが減っている。	富士見町南原山の自治会に加入している。コロナ禍以前は、傾聴ボランティア、詩吟、大正琴、尺八、ハンドベル等のボランティアの訪問があった。町の文化祭には毎年出品と見学を行い、中学校の職場体験の受け入れをしていた。流行が落ち着き再開が待たれる	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	地域との交流が減り力を活かさきれていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、その意見をサービス向上に活かしている。	運営推進会議で出された意見を、全員で共有し、できることは行っている。(現在は書面で開催)	コロナ禍のため開催できず。3か月に1回、取り組み状況などを書面にまとめ、参加予定者に配布されている。	運営推進会議の再開にあたり、引き続き、会議を活性化させる上でも、警察や消防署など多様なメンバーの参加を得て、施設の実情を知ってもらいながら、特に防災等において更に地域との連携を深めていかれることを期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる。	何か用がある時は連絡したり、協力したりしているが、常には連絡していない。	上記の通り、連携の良い機会でもあった運営推進会議がコロナ禍で開催されていないため、昨年と比較して連携する機会は少なくなっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	身体拘束についてマニュアルを作成している。身体拘束をしない取り組みを実践している。やむを得ず行う際は必ず身体拘束適正化委員会において判断するようにしている。研修に参加して資料など共有している。	身体拘束しない、虐待や不適切ケアをしない介護への認識は、月1回のスタッフ会議で話し合われている。法人が行う身体拘束や虐待、不適切ケアをしない研修には年に1~2回、2~3人の参加者があり、不参加者にはスタッフ会議で共有している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	研修などに参加し、出られない職員とは資料の読み合わせを行っている。少しのあざでもすぐに報告書を書く習慣がある。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	今後の課題としてある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	契約書はもちろんだが、その他緊急時の希望、ケガの際の同意書、看取りについての説明などの書類も一緒に渡し、ひとつひとつ丁寧に説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	運営推進会議で要望などがあれば報告する様にしている。必要に応じて、助言も外部の方から聞いたりしている。	コロナ禍による面会制限等で家族と顔を合わせる機会が減り、意見を伺う機会が減少している。法人が毎月発行する広報誌「ひなたぼっこ通信」と担当職員による手書きの手紙を毎月家族全員に配布し、利用者の近況や施設の取り組み等の報告に努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	月に1回職員面接を職責者が行っている。出た意見については職責会議で議題として取り上げている。	職責者である主任は、会議で職員が発言しやすい雰囲気づくりに努めると共に、月に1回全職員と面接を行うことで職員の意見を吸い上げ、運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	こまめに職員と話しながら個々の努力や実績、勤務状況の把握に努めている。向上心を持って働けるような整備を行うまではまだ手がついていないが意見を取り入れるなどして、やりがいにつなげてもらっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	外部研修の情報は、こまめに発信している。施設内部の研修は、ローテーションで回しているの、なかなか全員が受けにくい。そこで、少人数で何日かに分けての研修を行う形式をとるなど工夫をしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	同業者との交流する機会は、自施設での取り組みとしては出来ていない。しかし、他の機関で交流する機会を紹介することはしている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	資料を参考にしながらその方に合った方法を見つける。会話や行動等から情報共有し関わりに繋げている。入所したばかりの利用者には言動に特に注意している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	何か変更をする場合や利用者の状況が変わった時など連絡をこまめにおこない信頼関係を作っている。第一印象が悪くならないよう慎重に行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	本人や家族の話はよく聞くようにし、必要としている支援を見極めるよう努めている。何を望んでいるのかアセスメントをしながら話している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	出来ることはやって頂いたり、一緒にできることは一緒に行い、やって頂いたことに関しては感謝の言葉を掛けるようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	スタッフ全員とは築いていない。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	コロナ感染対策の為にできていない。(11月～面会制限緩和。各居室か面談室で20分程度面会可としている)	コロナ禍により、面会は家族とガラス越しで対面する形となっていた為、面会数も減少していた。友人等の電話の取り次ぎ、年賀状を出すなどの繋がりにはコロナ禍以前より継続して支援している。R3.11月から20分程度の面会が可能となった。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	気の合う方同士席を一緒にするなどして会話できるようにしている。他の利用者との関係には配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	サービス終了後は、あまりご家族とお話できていない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	日々の会話を通して把握し実行に繋げている。コミュニケーションのとれる利用者には都度希望を聞いている。会話が困難な方は様子を見ながら検討している。	担当職員やケアマネジャーが、日常の中でゆっくり関わる時間を大切に、本人との会話やコミュニケーション等を通して、思いや意向を聞くように努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	入所の際に資料に目を通し把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	連絡ノートやIpadを使い、把握に努めている。申し送りなどでその日の状態など共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	モニタリングについてあまり時間が取れていない。入退院などで状況が明らかに変わった際には話す場をつくれるよう心掛けている。また3ヶ月に1回見直しを行い、担当者、ケアマネ、家族の方に確認をしていただき向上に努めている。	ケアマネジャー、担当者を中心に、所属の看護師、提携している外部の理学療法士等の多職種が連携し介護計画が作成されている。3か月に1回、介護計画の見直しが行われており、介護計画の現状の確認と修正が行われている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	毎日その日の様子など記録に残し、職員間で確認し合いながら見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	似たような内容になりがちで柔軟にはあまりできていない面もあるが、施設で行える最良の支援を考え、行えるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	地域行事(生活展)には作品の物作りをしている。1人1人の出来る事、楽しく生活出来るように支援をしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	受診の際は提携している病院を勧め、移っても困らないような対応を心がけている。御家族の希望によっては施設入所後も主治医変更をしない事もある。利用者の状態に応じ往診、訪問診察も対応している。	基本的にかかりつけ医は本人及び家族の希望で決められるが、入居後の診療体制を考慮し、契約時に地元の協力医による受診体制を勧めている。協力医は往診にも応じている。受診時は看護師が付き添い、受診の支援を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	看護師とこまめにコミュニケーションを取りながら、適切な医療を受けられるよう工夫をしている。気づいたことは常に報告を行い、適切な方法を相談して、受診や看護につなげている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時、病院、ご家族と密に連絡を取り合いながら、ご本人が不安にならないよう細かく情報交換をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	重度化に向けた話や、終末期については、まだ全員ではないが初期の段階で話し合うよう心がけている。新しく入所した方には話したが、昔からいるご利用者様には、少しずつ話す場を作っている。	看取りの指針があり、入所の際に、本人及び家族へ対応方針を説明している。利用者の体調に変化が見られた際、主治医からの説明があり、施設関係者、家族らと話し合いがもたれている。職員は、対応方法等の情報を共有しチームでケアを実践している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	応急手当に関しては、AEDの講習会を毎年開催している。急変時の連絡系統についてもまとめている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	定期的に避難訓練を行っている。	定期的に避難訓練が行われている。車椅子利用者の2階からの避難方法について課題となっている。	地域との協力体制の構築について、具体的な形が出来上がっていかれることを期待します。また、備蓄(食料品、介護用品など)についても整備が進むことを期待します。

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	排泄時など、プライバシーの確保については意識してケアを行っている。	接遇研修があり、セルフチェック表で自己評価をし振り返りをしている。特にトイレ時は、ドア及びカーテンを閉め、プライバシーの保護や、居室のドアをノックして声掛けするなど、相手の気持ちを大切に考え接することに取り組まれている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	コミュニケーションの取れる方は、ご本人にお聞きしていることが多い。コミュニケーションが取れない方には、希望を推測しケアをしていることが多い。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	利用者一人一人のペースに合わせて行うことはできていると思う。その日の希望に沿えているかは、返事ができる方には話しているが、コミュニケーションが取れない方の希望には沿えているかは分からない面もあり、スタッフの都合になりがちである。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	自立の方は、ご自身が好きな服を選んで日々着用されている。毎週同じ服にならない様、入浴の際に変更している。また汚れていたら拭く等心掛けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	片付けや食器・お盆を拭いて頂いている。一緒に準備することはなかなか出来ていない	各々、出来る範囲で片付けなどのお手伝いに参加されている。フロアではご飯炊き、味噌汁等の汁物を調理し、おかずは外部業者に委託されている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	水分摂取量が低い方、拒否のある際、時間を置いて再度促し1日1ℓを目安に提供している。水分が摂れるようにトロミ剤などを使用している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	毎食後口腔ケア実施の際、利用者様がしっかりと歯磨きが出来ない際に職員が介入し口腔ケア(歯磨き)を実施している。自立の方には声掛けをしている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	夜間だけリハビリパンツを使用するなどしている。排泄のパターンを意識し、定時、希望時トイレ誘導を行い希望に応じた介助を行っている。	1階、2階の各ユニットに、2か所ずつトイレの設置があり、個別の排泄表を用いて利用者の排泄パターンを把握し、排泄の自立を意識した取り組みを行っている。自立の方は様子を観察しながらトイレ誘導し、全介助の方もトイレでの排泄を心掛け、実践している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	水分を勧めたり米油を味噌汁に入れたりしている。薬の調整、追加をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている。	希望時に入浴をして頂き、無理な入浴はしないようにしている。入浴剤を使ったり楽しみを増やしている。	入浴日は月曜から土曜の午前中が基本で、日に3名の入浴を行っている。おおよその曜日は決まっているが、体調等により時間帯や曜日を変更する等柔軟に対応している。入浴時間の長短、お湯の温度、入浴剤など要望を尊重しマンツーマンで支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	様子をみながら午前、午後と休息して頂いている。馴染みの物などを置き安心して頂けるよう努めている。室温にも気を付けながら支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	看護師を中心に管理している。内服変更した場合は連絡ノート、ipad申し送りに記載し様子をみている。薬のチェックを個々が行い、理解できるように努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	洗濯物たたみや、食器拭き等役割を持っていただいている。体操などもしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	コロナ対策もあり、なかなか外出が出来ていないが、ゴミ捨て時等職員が外に出る際には声を掛け、散歩など季節を感じて頂けるようにしている。	コロナ禍のため例年と比べて外出機会は減っているが、日常のごみ捨てや近隣の散歩だけでなく、車を使って、密を避けながら紅葉狩りなどに出掛けている。	

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	以前、希望者の中でお金を管理して頂いていたが紛失しかけたこともあり、現在は欲しい物がある際は職員に言って頂き、立て替えて購入するようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	本人の希望があれば電話を職員がかけてお話しする時間を作っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	共用空間は、1日1回は掃除を行っている。花や季節の物を飾るなど工夫している。	これまであまり活用されていなかった食堂脇の掘り炬燵のコーナーを改築し、ソファを置いてくつろげる空間に変えていた。ユーチューブが見られる大型の薄型テレビを導入。利用者は、ユーチューブで昔好きだった歌や番組などを楽しまれていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	ソファを置く等して気の合った方とお話しが出来る様にしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	馴染みの物があれば持って来て頂いたり、家族の方の写真を貼るなどして工夫している。快適に過ごせるよう状況によってエアコンを活用している。	家族等の協力を仰ぎながら出来るだけ居室に馴染みのものを持ち込んで頂けるよう取り組まれている。お仏壇を置いている入居者もみられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	なるべく安全には配慮した生活ができるようみんなと話し合いながらチェックをしている。		